

ASOSA

留学生の声

A reality better than my expectations

弘前大学 人文学部 特別聴講学生

トゥアン・アポリンヌ (フランス)



My name is Apolline Touin (トゥアン・アポリンヌ), a French international student at Hirosaki University. I enrolled as a special auditor for two semesters as a freshman, and started my studies in this Japanese university in October.

I came from the Bordeaux-Montaigne University, located in Bordeaux, France. I am currently in my third year of higher education in my home university, and I am graduating in Japanese language and culture. To put it in a nutshell, I am learning the Japanese language, with its grammar and writings, and Japanese history, society, literature and arts. My degree also provide to its students to learn old Japanese and Japanese anthropology in their third year.

The Bordeaux-Montaigne University has an agreement with the Hirosaki University since 1994, and it is thanks to this agreement that I was able to do my foreign studies here this year. I had the possibility to go to many other places, like Kumamoto, Nagoya, Tôkyô, Morioka, or Niigata, but my decision led me to Hirosaki. The first time I heard its name, it was in an exposition held in the *Maison du Japon* (Japan's House) in Bordeaux, presenting Hirosaki and its products, like the apples, Hirosaki lacquer, the Tsugaru shamisen, and the different festivals in Hirosaki. There was also comparisons between photographs of places in Hirosaki and the representation that was made for the *anime* titled *Flying Witch*. All what I discovered during this day developed my interest for this city I didn't know about. As I was with my best friend, learning about Hirosaki's culture, we both decided we would try to go together and study here.

My daily life here is quite different from the one I led in France. For example, I used to take a tramway to go to school. Here in Hirosaki, I ride my bike or I just walk to the university. It is quite great, because living with many other students in the international house make our paths cross when we all go to our classes or come back home. It's always fun to talk about our classes together, or to make plans for some activities together on some special days. I used to simply come back home after classes in France, so this was a big change for me.

But the most different thing is the way the city changes my mind. Bordeaux is one big stressful city, when Hirosaki is just calm and easy to live, like most cities in Japan. This was quite surprising for me, but I loved it when I first realized it. I quickly developed a kind of routine; because I have a friend who came in Japan too as an international student in Niigata, and because we see each other twice a month, I almost immediately started walking in Hirosaki to find some great places to show them. I was quite surprised by the number of Buddhist temples and shintô shrines. I knew Hirosaki was overflowing with temples and shrines, but what I discovered when I arrived here was better than my expectations. I immediately fell in love with this town's heritage and its charm.

Thus, what made me fully understand that Hirosaki was the ideal place to develop my interest in Japan and its culture was the course given at the university. Between Japanese classes, I could assist to lessons about the Tsugaru region's history, or Japanese literature – which already interested me back in France – and even tourism classes. In many field trips I had the opportunity to discover sides of Hirosaki I wouldn't have suspected the existence without my classes; I had the chance to see the Iwakisan shrine, to have a *zazen* experience or even to go skiing here in Japan. Thanks to these classes I took, I have seen I only could imagine before arriving in this city, and I have the sensation that my insatiable curiosity finds satiety.

I usually submit posts, like a blog, on my Facebook account so my family and friends can discover this side of Japan while hearing from me. I always receive comments saying how beautiful Hirosaki is, and how lucky I am to have such an experience. I only can agree with that.

Unfortunately, my best friend with whom I wanted to come in Hirosaki couldn't make it at the same time as me. So I wanted to do my best so I could show her what awaits her when she will come one day, and because she needs information for her paperwork I am here to help her.

And finally, because I want to share my experiences of Hirosaki and Japan with my family and friends, being here for one year gave them the opportunity to come too. All my family thought about coming in Japan to see me, and even some friends too! Because of the four wonderful months I spent here by myself, I want to show them a side of Japan they didn't suspect either, and I want them to make wonderful memories the way I am making my own myself as an international student in the prefecture of Aomori.

ASOSA

留学生の声

「留学とは人との転機？」

弘前大学 農学生命科学部 1年

ルーティゴックマイ (ベトナム)



「人は一生の間に一度でも是非母国以外の国に行くべきである。」や、「外国に行けば世界を広げられる」など、ある人が言いました。留学って名付けの通りに外国に留まり学ぶことです。世界中のいろんな人々に出会えて自分の考え方も多角度に開かれるかもしれません。特に、発展途上国のベトナムに対して先進国である日本で留学することができれば、将来自分の国のために何か貢献できるかもしれないと思いました。

ただ、なぜ日本なのかは、正直にいうとはっきりわかりません。ただ、人はみな個性を持っており、まったく同じ人は絶対に存在しません。私は高校を卒業してから同級生の友達と違う別の道を選びました。6ヶ月間ベトナムの日本語学校に通ってから日本に来ました。ベトナムの日本語学校で日本の事、ベトナム留学生の事そして在日している先輩や帰国した先輩の事などを知る中で、これは私の道だ、私の目指すべき将来だと頭の中に思い浮かべていました。

しかし、自分が思っている程、将来へ行く道は簡単な道ではなかったです。ベトナムは日本より貧しい国なので、私費留学生の私の学費を、親からの仕送りを大学4年間もらおうとすると全く足りません。そこで、仕送りを受け取らず、自分でアルバイトしながら生活費、学費を全部払いました。来日してから2年間、盛岡の日本語学校で日本語、日本生活、日本の文化特に日本の国立大学に入るための勉強、そしてアルバイトをして過ごした後、弘前大学に入学することが出来ました。

弘前大学の入試試験日を振り返ると、何ヶ月も前のことではなく昨日のこのように感じられます。当日、面接試験があり、面接官の先生が「なぜ日本に来ましたか？なぜ弘前大学を選んだのか？」という質問されました。そして、日本で勉強した事をベトナムに帰って貢献しますと答えたら、その先生が「聞くだけでもすごいですね」と言ってくれました。その時はうれしいという感情はなく、不安ばかりでした。そこで「先生、嘘ではないです、私は本気で答えました。身長は150cmで体が小さく見えるけど、体より何倍も大きな夢を持っています。」って先生に伝えました。結果として、弘前大学の学生になる事が出来ました。

弘前で生活が始まってからずっと、盛岡に帰りたいたいと思っていました。盛岡にいた時はなんでも日本語の先生が助けてくれましたが、今はなんでも自分で考えて決めてやるようになりました。アルバイトは3、4回探しても、外国人だから採用しない、外国人だから時給を減らすなど、アルバイトを始めても最初は人間関係がうまくいきませんでした。他にも、大学の講義と一緒に受講した人でも、外で言えば全く知らない人のふりをされたり、冷たい顔をして話しかけてくれなかったりしました。その時私は、「なぜだろう？」と疑問に持ち、悩んでしまって、それは相手のせいだ、私のせいではない、と考えてしまいました。しかし、自己反省してやっぱり自分のせいだと思いました。人から話しかけられなければ終わりというわけではなく、自分からも話しかけてみればいいだけだと、自分が考えすぎで、一人で悩んでばかりは良くないことだと反省しました。弘前で生活に少しずつ慣れてきて、弘前市私費留学生就学援助事業のおかげで、弘前市内のいろんなイベントに参加し、地元の人と接する機会も増えました。そして、弘前市内の日本企業で働いているベトナム人たちの日本語を向上させるため、私がポ

ランティアで日本語を教えることもありました。クラスの友達もアルバイト先の人も親切にしてくれるので、毎日笑顔いっぱい過ごしています。

「人との出会いを宝にしてでっかく生きろ」というモットーを胸に刻み、私は毎日出会えた人との関係を大事にすることで、自分の人生も少しずつ多様になり、視野が広がると信じています。大学の勉強もアルバイトでの経験も、全てを糧にして自己実現に繋げようと思っています。弘前に住むのは私の一つの縁だったのか、弘前に来てから自分の考えも人との関係も以前より良くなったと実感しています。多くの留学経験者が言うように、私にとって弘前大学での留学は人生の転機です。これからも精一杯前向きに進んで成長します。

ASOSA

留学生の声

「日本で感じたいろいろ」

青森大学 総合経営学部経営学科 4年生

張 詠筑 (台湾)



日本に来てから、これまで本やインターネットで見た日本や理解した日本文化をやっとこの身をもって感じる事ができました。この約二年間の留学生生活を振り返ると、自分は多くのことを勉強し、成長できたと思います。

その成長の理由の一つとして考えられるのは、それまで学んだ日本語を見直せたことです。日本に来て、身近に日本人と接しているうちに、自分が学んだ日本語を場面によって適切に使うのは難しいと感じました。どんな場面でどんな言葉を使うかしっかり見分ける必要があると実感しました。また、日本人の若者の会話を聞いたり、あるいはテレビを見たりしているうちに、日本語が変わっていることに気づきました。たとえば、新しい言葉の出現、略語の使い方、単語の使い方や意味の変化、外来語と敬語の大量使用など、いろいろありました。それに対して、私はというと文章を書く日本語は大丈夫でしたが、話す日本語は少し硬く古く感じられました。文章を書くための言葉はたくさん覚えましたが、生活に必要で簡単な日本語をうまく使うことができませんでした。これらの問題を発見したおかげで、これから日本語を勉強するのはどう努力すればいいのか少し分かったような気がしました。それからは努力の毎日でした。

約二年間の生活で、日常生活のいろいろな面から日本や日本人を以前よりもっと理解できるようになりました。日本人は、環境を大切に、空間と資源を最大限に利用します。他人と付き合う時、礼儀を重視して、お互いに一定の距離を保ち、相手の私生活に深入りしないです。たぶんそのために、日本人はほとんどの人がやさしく、過激な言葉を使ったり、失礼な行動をとる人は少ないです。ですが、授業の時、全然学生を見ない先生やずっと頭を下げたままで発表する学生を見たとき、どうしてなのかと感じました。女友達同士でも一緒に遊ぶ時、ボディータッチが少なく、手を繋ぐことや腕を組むことはほとんどしません。台湾人に比べると、日本人はちょっと内向的な民族だと思います。

留学のおかげで、日本を内側から見る事ができて、あらためて自分をもっと日本のことを知るべきだなと感じました。世界で日本が愛されるのはアニメやマンガといった文化だけではなく、伝統的な日本の文化や日本人の精神に触れられるからだと思います。日本人が日本の文化を大切にするように、私も台湾の伝統や文化を大切に、また深く学び、それを外国の皆さんに伝えられるようになりたいと思います。

何よりも、留学したからこそ出会えた、すばらしい友達がたくさんいました。今までの友達とはまったく価値観が違う人たちに会えて、「一緒に何かをするうちに少しずつお互いをわかり合うことができた」という経験は留学でしか得られない最高の喜びでした。このことを教えてくれた大切な二年間の留学生活でした。

ASOSA

留学生の声

弘前での生活

東北女子大学 家政学部児童学科 3年

刘 昭源 (中国)



私は小さい頃から両親と一緒に日本で生活をしていました。大学に入学してから両親が帰国することになり、在留資格も「家族滞在」から「留学」に変更となり、留学生となりました。

中国の生活よりも弘前での生活が長いため、中国と弘前を比較することは難しいですが、弘前には四季の祭りがあり、季節を感じることができます。春は弘前城さくら祭り、夏はねぷた祭り、秋はもみじと菊人形祭り、冬は雪灯籠祭りが 있습니다。これらは弘前が世界に誇れる文化だと思います。私は小さい頃からどの祭りにも参加しています。弘前は冬は雪が多くて大変だと感じますが、食べ物はおいしく、みなさん優しい人ばかりです。私は弘前が大好きです。

東北女子大学のいいところは、女子しかなくて少人数の大学だから、周りに気をつかう必要がないところです。友達も、留学生という接し方ではなく、普通の日本人の友達のひとりという感じで接してくれるので、安心して生活することができます。

勉強はグループワークや実技が多いです。特にピアノの授業は個人指導なので、難しい楽曲も先生がていねいに教えてくださるので、上達が早い気がします。私はもともとピアノを弾くことが得意でしたが、大学の授業を通して、ますます好きになりました。

幼稚園と保育園に教育実習にも行きました。最初は子どもたちと、どう触れ合っていかわかりませんでした。かわいい子どもたちに「せんせい」と呼ばれ、とてもうれしくなりました。実習をする中で、どんどん先生になりたい気持ちが強くなり、現在はその目標に向かってがんばっています。

大学の建物から岩木山が正面に見えるのも素晴らしいと思います。まわりにさえぎる建物がないので、とてもきれいに見えます。

これからしてみたいことは、色々な所を旅行してみたいです。弘前以外のいい所を知り、日本の歴史や文化についてたくさん勉強したいと思っています。中国へひんぱんに帰ることは無いけれど、日本で学んだことを中国の人たちにも教えてあげる機会があればよいと思っています。大学の勉強以外にもボランティアなど、たくさんのかたちを経験して、自分の夢をかなえたいと思います。

ASOSA

留学生の声

弘前での一年

弘前学院大学 日本語・日本文学科

呉 東珍 (韓国)



まだ雪だらけだった3月から約1年が経ち、あっという間にまた冬になりました。帰国を目前に控えている今、帰りたくないと思ってしまうほど寂しい気持ちです。弘前と弘前学院大学のような素晴らしい所で過ごすことができ、幸いだったと思います。

大学生活は学ぶことばかりでした。日本語はもちろん、日本の文化や慣習についても教えてもらいました。また、日本のパソコンで作業をしたり、日本のキリスト教について学んだりした他、外国人学習者に日本語を外国語として教えることも学習しました。全て有意義で、勉強になりました。勉強だけでなく、春には新入生と一緒にリトリートに参加したり、秋には大学祭や津軽の文学ゆかりの地をまわる文学散歩にも行ったりして、とても楽しかったです。

大学の外でも、様々な経験ができました。五所川原のたちねふたで皆と一緒にねふたを押ししたり、弘前の6つの大学の学生委員会である「いしてまい」のメンバーとして活動したり、青森県ユネスコ協会のグローバルパーティーに参席したり、「話してみよう韓国語」青森大会のスタッフをやってみたり、弘前日本語クラブで毎週日本の文化について教えてもらったり、青森のランチクラブで料理を習いながら多くの日本人・外国人たちと交流したり。これら全部、大切な思い出となっています。

この一年間、毎日が充実していました。最初は悩み事や困る事もありましたが、皆さんのおかげで一年間の留学生活を無事に終えることができました。大変お世話になりました。ここでの経験はこれから先の自分の人生において、大事な財産になるだろうと思います。素敵な一年を、ありがとうございました。

ASOSA

留学生の声

時は流れる水の如し、あなたに感謝

八戸工業大学大学院 工学研究科 社会基盤工学専攻 3年

劉 耘 (中国)



月日の経つのは行き交うシャトルのように早いもので、瞬きをする一瞬の間に、八戸工業大学博士課程での3年近いここでの忘れがたい日々を過ごした素晴らしい時間、間もなくお別れの時に当たり、様々な思いが頭に浮かび上がる。

初めて八戸工業大学に来た時、整った環境、見渡す限りの桜の花、きれいなキャンパス、力強い枝の松の木、和やかな笑顔、あちこちに独特の風景が広がり、学長先生から職員まで、教師から学生まで皆温厚で善良、これらが私に益々親しみを感じさせ、家族のような温かさが自然と湧きあがった。

八戸工業大学で学んでいる間、学長先生の親密さ、指導教授の謹厳さ、教授の勤勉さ、教師の几帳面さ、職員の責任感、学友の仲睦まじさ、学生の礼儀正しさ、雰囲気楽しさ、これらが皆私に深い印象を与えた。八戸工業大学に来てから、大学は生活と学習の面で、ここでの学習生活に後顧の憂いが無いように決め細かく行き届いたお世話を下さった。

また、いろいろな活動を通して異なる文化のもたらす異なる息遣いを感じさせ、視野を広めさせ、三沢の塚本さんや八戸の田鎖さん等多くの友人ができた。ここでは留学ではあったが孤独感はなかった。むしろここで感じたのは温かさや友好であった。友人がそばにいる所では温かさと愛に満ちており、心に温かいものが流れているものだ。

八戸工業大学の先生、職員、学生それに友人は皆とても深くて美しい印象を残してくれた。これは私の一生の貴重な財産であり記憶である。私は常に恩を感じ心にしっかりと刻んでおこう。

ASOSA

留学生の声

日本留学随想

八戸工業大学大学院 工学研究科 機械・生物化学工学専攻 3年

馬 東建 (中国)



三年前を思い起こせば、私はまだ中国の西北の地にある故郷にいて、吹雪の舞う極寒の冬、留学のため期待と落ち着かない気持ちでいっぱいだったが、今この時になってみると、もうすでに日本での勉強も三年目になっている。間もなく帰国の楽しみが近づくと同時にこの三年の留生活の懐かしさが次々と思い起こされ、複雑な心境である。

三年の間、先生は学問には厳しく、人には温和で私には得るものが多かった。日本の友人の善意、親切心はこの異国で学ぶ学生にさらに温かく感じられ、心を強く打たれた。

実験室では、先生や学友と共に夜も日も過ごし、辛いことや失敗もあったが、あきらめずに続けた。バスケットボール、綱引きの試合でも私たちは気持ちを一つにして協力し、先を争う姿が見られた。友人と共に杯を傾け、駄弁り、それでも語り尽くせない場面もあり、そこには私たちの厚い気持ちが内に秘められている……。様々な日本の美食、美酒もなかなか捨てがたい。

記憶の中のものは、そのどれもが皆美しく温かい場面である。太平洋の西岸、蕪島のうみねこ、弘前公園のお堀の満開の桜の咲く幻想的な小道や、京都、奈良に伝えられた千年の時を経た古刹は一衣帯水の日中両国の交流の長さを感じさせ、また、夏の江の島のやさしい清風と波の音。八工大キャンパスの四季の景色も-----春の絢爛咲き乱れる花々、夏の濃い緑、秋の紅葉、冬の静寂と純白は何と回想に尽きないことか。

ASOSA

留学生の声

私が見た日本人

八戸工業高等専門学校 建設環境工学科 第5学年

ムハマド ハキム ビン アフェンディ (ハキム) (マレーシア)



日本で私の印象に残った話を二つしたいと思います。

一つは、私が日本や日本人に最も印象づけられたのは災害に遭った時です。私は、日本に住んでいるあいだに、強弱の多くの地震を経験しました。私が気になるのは、日本が他の国とは違う地震計を使用していることです。マレーシアは地震の少ない国だったので、同じ測定スケールだったのかはわかりませんが、日本は、地震の強さを測定するために台湾と同じ震度スケールを使用します。それは、モーメントマグニチュードスケールおよび以前の Richter マグニチュードスケールのようなマグニチュード測定とは異なり、震度の単位で測定されます。マグニチュードスケールは、地震によって放出されたエネルギーを記述しようとする試みであるのに対して、JMA スケールは様々なポイントでの振動の程度を表しています。JMA スケールとは日本の地震の震度が測り規模で、例えば東北地震は、8度で、熊本地震の場合には7と6 lower と分けられました。

私の初めての地震の経験は3年生の時です。私の携帯電話がビッグ・シグナリングを開始し強い地震が起こると告げたのは、午前3時ごろの深夜でした。日本には地震発生直前にすべての住居に数秒前に伝える最も進んだ地震防災システムがあります。私の部屋が揺れ始めたときに私は恐ろしくなっすぐ外に出ました。しかし日本人のみんなは寝ていました。その事件の後まわりをよく見てみると、地震が起こっても、日本人にとっては地震がおこるのは当たり前だから落ち着いています。地震以外にも日本には、津波、台風、火山噴火などの自然災害が多くあります。幸い私がここに滞在している時に経験したことはありません。

もうひとつ印象に残ったのは、北朝鮮が核ミサイルの試験を開始した2017年後半のことです。北朝鮮はアメリカを標的にしていたので、ミサイルは日本上空を飛び太平洋に沈みました。日本をはじめとする多くの国がミサイル発射実験を非難したのですが、北朝鮮の指導者は警告を無視し軍事目的を維持し進め続けていました。また、これは年末に会社でインターンシップをしていたときに起こったことですが、突然、午前6時30分ごろサイレンが鳴り、突然警報が鳴り響きました。ニュースは、北朝鮮が太平洋に向かって3発のミサイルを発射したと報じました。しかし、日本の人々は静かで合理的に状況を理解しました。これは私のような外国人のための良い見本です。

このように日本の建物やインフラは台風や地震などの自然災害にも耐えることができますが、悲しいことに、人類にはまだ大きな津波を克服する技術はありません。自然災害に耐えることは、私の興味を引くものであり、私が日本で勉強したいことです。東北地方太平洋沖地震で日本を揺るがしたマグニチュード9.0の地震でさえ、東京と仙台の建物構造にほとんどダメージを与えませんでした。エンジニアが日本全国のビルに建設した基礎と構造が最も印象的でした。

ASOSA

留学生の声

私の留学生活

北里大学大学院 獣医学系研究科獣医学専攻博士課程 3年

ポンパパイ トツサボン (タイ王国)



私はタイから来た、ポンパパイ トツサボンです。年齢は27歳です。私は2015年に北里大学大学院博士課程に入学しました。日本に住み始めて私は日本のほとんど全てのものに感心しています。十和田市に着くと、私の心配はだんだん小さくなりました。なぜならそこは、山と木に囲まれた小さなきれいな町だったからです。日本の食べ物は、とてもすごいと思います。新鮮で注意深く調理され、綺麗に並べられます。また、私は日本の独自の文化に、とても興味をもっています。これまでに、私は北里大学獣医学部紅葉祭では生け花体験、青森県弘前市の留学生文化交流キャンプにも参加しました。キャンプではたくさんの日本文化を知ることが出来ました。

日本人はとても礼儀正しく、日本人同士でも、外国人に対してもよく頭を下げます。全体として社会は平和で人は皆丁寧です。大事なのは、日本人の無限とも思えるほどの友好的な態度と助けようという姿勢が外国人に向けられることを私はありがたく思っていることです。いい体験だけでなく、来たばかりの時日本人と話すと、恥ずかしくて何も言えなかったのですが、今は自信を持って話せるようになりました。

10月の末、初めての冬も来ました。タイは雪が降らないから、初めて雪との生活を楽しみました。本当に綺麗でした。雪の景色は一回を見て、忘れられないと思います。

3年も経つと十和田での生活も慣れてきて、この青森県の季節が大好きになっています。1年を通して、私は「色」の変わっていくのを楽しんでいます。春、私は桜を楽しみます。夏、私は自転車に乗って町の周辺を走り回り、花火を楽しみます。秋、木々の葉が色づくのを楽しみます。冬、私は毛布の中で小さくなっていると幸せです。窓には雪が沢山降っています。私は周りの人たちのおかげで、ちっとも寂しくないし友達がいらないと思わないことです。皆さんに本当に感謝しています。これまでの三年間、日本で生活してきて、たくさんの優しい人に出会え、毎日がとても充実していました。日本に留学するという決断をして本当によかったと思っています。

ASOSA

留学生の声

韓国との文化の差

青森公立大学 経営経済学部 経営学科 1年

鄭 仁優 (大韓民国)



私は昔から隣の国、日本に対してとても関心を持っていました。近くて遠い日本という国には韓国とはどんな共通点があるか、あるいはどんな違いがあるか、特に生活する環境、文化の差について興味がありました。しかし、韓国での学業の忙しさを言い訳にして、日本のことを詳しく調べたり、直接日本へ旅行に行ったりすることもなく、高校2年生までの時間が過ぎました。ある日、学校の掲示版に青森公立大学に留学できるという掲示文を見ました。見た瞬間、今回の機会を逃せば、旅行を除いて日本に行くチャンスは二度と来ないと感じて、すぐ応募し面接を受けました。日本語という言語の障壁がありましたが、興味を持っていた国の言葉なので、学業のスピードは速かったし、最終合格の知らせを聞いた時は、空を飛ぶ気分でした。

初めて韓国を離れて海外での生活は慣れなくて難しかったですが、先輩たちの助言や市役所の方々の助けなどですぐ適応しました。しかし、「文化の差」については慣れたかどうかまだよく分かりません。

「文化の差」を初めて感じたのは入学式の時です。韓国は入学式をする時にスーツを着ませんが、日本はスーツを着て入学式に参加すると聞いて、初めてスーツを購入しました。

二番目は自販機が多いということです。韓国では店の近くや学校、病院の中など特定の場所に設置されている場合が多いですが、日本では、少し見回すと自販機が見つかることと、飲み物以外にも多様な種類の商品が販売されていることに驚きました。

三番目は、カードより現金を主に使う文化です。代表的な例として、韓国は食堂でご飯を食べたり買い物をしたりする時、クレジットカードを利用して会計をしますが、日本は現金を主に使用することに驚きました。日本に来て大きく変わった点の一つがいつも手元に現金を準備しておくことです。

尊敬語や謙譲語と言葉の表現の差など通訳するときに困ったという経験もありました。この差を克服するために、もっと日本語について勉強して両国の言語をもっと自然に通訳できるように努力しています。今も文化の差は感じますが、その差が減っていくほど日本に適應できていることを肌で感じています。

4月の春フェスティバルや、花見、7月のバーベキュー、8月のねぶた祭り、10月の大学祭、11月の紅葉狩り、1月の大雪など青森で留学した1年間、大変だったことも多かったですが、楽しくて幸せだったことのほうがもっと多かったです。これからの青森での生活も、様々な人たちと出会い、一つでも多くのつながりを作りながら、今よりもっと楽しみたいと思います。

ASOSA

留学生の声

成長を実感しながら楽しむ日本での留学生活

青森中央学院大学 経営法学部 2年

レ ティ スアン ツ (ベトナム)



日本で生活するようになって、あっという間に2年目となりました。来日当初と今の私は学習と生活の両方がうまくできて、いろいろなことが分かるようになりました。

日本に来る前、日本語を3カ月しか勉強しなかったので、来日したばかりの頃、簡単な会話さえできませんでした。そして、日本語1クラスに入り、色んな外国人の友達と接して、毎日一緒に会話を練習したり、お互いのいいことを学び合ったりすることによって、日本語が徐々に上達していき、そのおかげでコミュニケーションも上手に取れるようになりました。1年の後半から、初めて専門講義を受けて、初めて日本語で経営と法学に関する本を読みました。一生懸命専門的な単語の意味を調べ、分からないことをインターネットで関連がある情報を探して、理解できるまでとても努力しました。本を読むのはけっこう時間がかかるものです。しかし、今では長い文章や専門的な書籍を読むことはそんなに難しくなくなりました。

生活については、今は大学の寮に住んでいます。シングルルームで暮らすのはいろいろなメリットがあります。まずは自分の好みに合わせて家具や物などを自由に並べることができます。また、部屋に一人しかいないから、静かに集中して勉強することができるので留学生活が送れるでしょう。しかし、部屋に一人しかいないからこそ、悩んでいます。なぜなら突然に体調が悪くなっても、誰も世話をしてくれない恐れがあるからです。また、節約のため、ほとんど自分で料理を作り、せめて一日一回はご飯を食べるようにしています。また生活費を稼ぎ、親の役に立ちたいという理由で、週に3、4回アルバイトをしています。

将来、日本に就職するにしても、ベトナムに帰国するにしても、これから一步一步少しずつ頑張っていきたいと思っています。まずは今年の七月に日本語能力試験N1に120点以上合格するという目標を立てました。さらに、卒業するまで、学期ごとに20単位を取ろうと思っています。

ちなみに、アドバイスとして日本に留学を希望している皆に自分が留学生活から分かったことを伝えたいです。まずは健康的に生活するべきです。例えば、遅く寝ることやファストフードをたくさん食べることをしないでほしいです。それらは体に悪影響を与えるものですから、元気でなければ、勉強も上手くいかないに違いありません。また時間を有効的に使うことです。毎日諸事を上手に行うため、やるべきことをリストアップして、翌日に繰越さないように、多く書かず、順番にやっておいた方がいいと思います。

留学することによって、色んな国の友達と出会って、交流して、親しくなる素晴らしい機会を得ました。さらに自分が学習と生活の両方をうまくコントロールできるから、私にとって異言語または異文化の日本に留学するのは貴重な体験です。

ASOSA

留学生の声

日本での留学生活

青森中央学院大学大学院 地域マネージメント研究科 2年

何 凱凝（中国）



2016年の秋、一人で青森に来た。来たばかりの時、大都市のにぎやかさ、または中小都市のロマンチックな雰囲気がこの町では感じなくて、留学生活にとって必要なもの、さらに面白いものがあまりないと最初に私は思った。その時、まだアルバイトをしていなかった私は研究以外、何をすればよいかが全然分からなかった。と同時に、ふるさとへの思いも強くなった。時間が経つにつれ、留学生活に少しずつ慣れてきた私は、最初の思いが間違いだったと気付いた。

うちの大学は、留学生たちが早く新しい環境に慣れるために、至れり尽くせりの配慮をしている。大学の先生方が留学生に一人ずつの研究生活に注目し、毎週、留学生との打ち合わせを行う。最近の様子を聞いたり、勉強または生活の悩みも聞いたりする。そのときは、故郷のような温かい雰囲気を感じた。また、日本の文化を深く理解するために、大学は時々異文化コミュニケーションの活動などを行う。例えば、小学生の英語への興味を高めるために、留学生が青森市内の小学校に行き、英語で簡単にコミュニケーションをすること。さらに、大学は留学生を連れ、県内に旅行にもよく行くこと。青森の景色は本当にきれい。春になると、桜が咲いている。夏になると、木の緑が目いっぱい入っている。秋は、葉が次々と黄色くなり、色とりどりの山などが言葉にならないほど美しい。冬、町が真っ白になり、すべてのものが雪に覆われている。一年四季、四季分明。大学がその機会を創り、留学生のみんなと一緒に旅行をすることをきっかけとして、みんなの関係が近くなったり、各国の文化を感じたり、自然の景色も観光したりした。異国にいる留学生の私たちは一人ではない、大学のみんなが家族である、と強く思うようになった。

課外活動はもとより、学業のことが最も注目されている。毎週大学院の授業があるほか、ゼミの発表、自分の研究課題についてさまざまな準備が必要である。キャンパスの図書館、県立図書館などに行き、自分の研究に対する必要な資料を探る。生活はほぼ、寮、図書館、研究室のシャトル三昧。一年生の後半期からはアルバイトをし始めており、三昧の三が四になった。もちろん、これは別の話である。

指導教官からたいへんよくご指導をいただいている。週1回または2回のゼミで、自分の研究課題について発表し、先生との繰り返しの質疑の中から、研究の方向性が見えるようになった。修士論文が順調に進み、自分の考える力も思わずの進歩があった。日本語が母語ではない私に対して、迷っていることが全部解明するまで、先生が根気よく何度も優しく説明してくれる。

青森での留学生活のおかげで、数多くの留学生や日本人と友達になり、素晴らしい指導教官も出会い、日本での生活にもが慣れた。未来の人生も明らかになってきた。今後とも感謝の気持ちを持ちながら、前に進もうと考えている。